

叙想的時制と叙想的アスペクト

渡 邊 淳 也

1. はじめに¹

時制の基本的機能の定義としてもっとも通例化しているのは、「動詞があらわす事行 (procès) を時間軸上に位置づけること」というものであろう。その定義自体は、ほとんど公理的なまでに、異義をさしはさむ余地がないようであるが、一方で、時制が事行を直接位置づけるのではなく、事行を発話者が概念的にとらえなおした結果としての内容や、事行を眺望する基準点 (point de référence) ないし視点 (point de vue) を時間軸上に位置づけていると考えられる事例もまた、枚挙にいとまがない。詳細には次節以降みてゆくことになるが、ここではまず、導入として少数の例をみておきたい。

フランス語の半過去を例にとると、つぎのような例文がそれにあたる。

(1) Lundi prochain, il y **avait** un match ; mais je n'irai pas.

(Maingueneau 1999, p.93)

来週の月曜、試合があった。でもわたしは行かない。

(1) では、「試合がある」という事行は、それ自体の時間軸上への位置づけとしては「来週の月曜」であり、明白に未来のことである。しかしながら、「mais je n'irai pas」というように、試合に行く予定が破棄されていることから、「試合がある」という事行を眺望する視点が、試合の予定がなお有効であった過去におかれることになる²。その視点の過去性を半過去があらわしているのである。

おなじく半過去の例で、「時制的用法」(emploi temporel) とはちがう「モデルな用法」(emploi modal) とみなされることもある「接客の半過去」(imparfait forain) の例をあげよう。接客の半過去は、(2) のように、店員が顧客に用向きをたずねるときに用いられる。

- (2) Qu'est-ce qu'il vous **fallait** comme ruban ? (Martin 1987, p.118)
 リボンはなにがご入り用だったでしょうか。³

この用法については、渡邊(2006 b)(2007 a)で詳細に考察し、接客の半過去を用いるタイミングの制約や、用いることのできる動詞の制約などから、この用法の半過去は、過去時を指示する時制的な性格が濃厚であるという結論を出した。その際、指示されている過去時とは、(2)の例に即していうと、動詞 *falloir* によって示される、対話者(顧客)にとっての必要性である。もちろん、「相手をお願いをしたい」ということは、発話時点も変わらないのであるが、あえて視点を過去においてその必要性を眺望することを示しているのである。その欲求や必要性に店員が持続する注意を向けていたことを標示することが、入念な接客を意味することになり、丁寧さの意味効果が出てくる。

これまでみてきたような、事行を眺望する視点を位置づける時制を、寺村(1984)の用語、「叙想的テンス」にならって、本稿では、「叙想的時制」と呼ぶことにしたい。

寺村(1984, pp.78-80)は、「叙想的」の対義語を「叙実的」としているが、「叙実的」というと *factuel* ではなく *factif*⁴ の意味に解されるおそれがあるので、本稿では「叙事的」という用語を用いることにする。すなわち、時制が事行を直接時間軸上に位置づけるような事例を、「叙事的時制」とよぶことになる。

叙事的時制と叙想的時制との対立に対応する、既存のフランス語の用語として、もっとも適切であると考えられるのは、Martin(1987)の第4部で論じられている *temps de re* と *temps de dicto* である。*de re / de dicto* というのは、もともとは論理学から借用されてきた概念であるが、Martinによる *temps de re / temps de dicto* の対立は、それぞれ、時制が事象に適用されるか、あるいは発話者による発話内容の引き受け (*prise en charge*) に適用されるか、という相違を基本にしており、Martinは後者の概念によって、時制のいわゆるモダールな用法のいくつかを説明することをこころみている。これらのフランス語の概念は、これから問題にしてゆく叙事的時制、叙想的時制にうまく対応するものと考えられる。したがって、以下では、字義的なちがいを超えて、叙事的時制と *temps de re*、叙想的時制と *temps de dicto* を、あえてたがいに訳語的な関係にある用語として扱うこととしたい。

ところで、時制に叙事的・叙想的という区別があることと平行的に、本稿では、アスペクトにも叙事的・叙想的という区別がみとめられることを主張する

ことになる。叙想的アスペクトについても、詳細にはあとで言及してゆくことになるが、ここではさきほどの叙想的時制の場合と同様、フランス語の半過去にかぎって、少数の例をみておくことにしたい。

まず、絵画的半過去 (*imparfait pittoresque*) とよばれる事例をあげることができる。

- (3) La clef **tourna** dans la serrure. Monsieur Chabot **retirait** son pardessus qu'il **accrochait** à la porte d'entrée, **pénétrait** dans la cuisine et **s'installait** dans son fauteuil d'osier. (G. Simenon, *La danseuse du Gai-Moulin*, dans *Œuvres romanesques*, p.599)

鍵が鍵穴のなかで回った。シャポー氏は外套を脱ぎ、それを入り口のドアにかけるのだった。そして、台所に入り、柳のひじかけいすに腰をおちつけるのだった。(フランス語では太字斜字体が単純過去、太字が半過去、日本語では破線下線部が単純過去対応箇所、実線下線部が半過去対応箇所)

この例で、連鎖する半過去でのべられているのは、完了アスペクトの事態であり、しかも、物語の前景 (*premier plan*) であるので、本来なら単純過去で示されるはずであるが、それにあえて半過去を用いることで、いわば、情景を静止画 (あるいはスローモーション) でえがきだすような効果が生まれ、「意味のある行動」というニュアンスや、探偵小説にふさわしいサスペンス効果がえられるのである。こうした場合、事態そのもののアスペクトを示すことをあえて犠牲にして、その事態をどのように眺めているかというアスペクト、すなわち本稿でいう叙想的アスペクトの標示を半過去がになっていると考えることができる。

さらには、結末の半過去 (*imparfait de clôture, imparfait conclusif*) とよばれる用法をみよう。

- (4) Comme elle avait été à l'Opéra, une nuit d'hiver, elle rentra toute frissonnante de froid. Le lendemain elle toussait. Huit jours plus tard, elle **mourait** d'une fluxion de poitrine.

(Maupassant, *Regula*, dans *Contes et nouvelles*, vol. 1, p.407)

ある冬の夜、彼女はオペラに行ってきたので、すっかりこごえてかえっ

てきた。翌日、彼女は咳をしていた。1週間後、彼女は肺炎で死ぬのだった。

この例において、「彼女が死んだ」という結果は、元来は完了アスペクトを有する事態であり、単純過去で示されてもよさそうなところである。それにもかかわらず、あえて半過去を用いることにより、事態の内部に視点を置いて眺めたような形で、あたかもスローモーションのようにえがき出される（このこと自体は、絵画的半過去と同様である）ようになり、「重大な結果」という意味効果をもたらされるのである。したがって、この例もまた、事態そのものの完了アスペクトの標示よりも、その事態の見かたを規定するためのアスペクト標示を半過去がになっていると考えられるのである。

叙想的時制については、これまで多くの先行研究でもふれられてきたが、叙想的アスペクトに関しては、個別の用法について論ずるなかでは気づかれていながらも、一貫した扱いはうけてこなかったように思われる。たとえば、Martin (1987) の第4部は、時制のいわゆるモダールな用法を叙想的時制として研究しているが、それをアスペクトには適用していない。本稿ではアスペクトのなかにも、指示された事態そのものもっているアスペクト（叙事的アスペクト）のほかに、発話者の観点からあえて事態そのもののアスペクトとは別のとらえかたをした結果として出てくるアスペクト（叙想的アスペクト）の相違が存在することを摘示し、時制論のみならずアスペクト論においても叙想性が重要になることを確認したい。

以下の論述は、つぎに示すような手順によってなされる。2節では叙想的時制について、3節では叙想的アスペクトについて詳細に検討してゆく。いずれの場合にも、叙想性が未完了性と密接にかかわりあっていることが確認されることをふまえて、4節では、叙想性と未完了性とあいだにどのような関連があるかを考察する。5節では、叙想的アスペクトが、認知言語学で提唱されている認知モードと対応している可能性について検討する。

2. 叙想的時制—半過去の事例

以下では、叙想的時制の事例研究として、半過去のさまざまな用法をとりあげる。結論を先どりしていうと、「叙想的時制」の概念を用いることにより、通例、半過去の「時制的用法」とよばれるもののうちの一部と、おなじく通例、半過去の「モダールな用法」とよばれるもののうちかなりの部分をうまく説明でき

るように思われる。以下では、あくまでも提示の便宜として、おおよそ、いわゆる「時制的用法」と「モダールな用法」の順で検討してゆくが、「叙想的時制」の概念を導入することで示されることは、まさしく、「時制的用法」と「モダールな用法」のあいだに存在する連続性であり、ある意味では、この伝統的な区別を解消することにつながってゆくこともあわせて示してゆきたい。

2.1. いわゆる「時制的」用法にみられる叙想性

以下では、通例「時制的」用法とみなされている用法のなかにも、叙想的な用法であると考えられるものがあることをみる。

2.1.1. 時制の照応 (concordance des temps)

半過去のいわゆる「時制的」用法のなかにみられる叙想性として、まず挙げることができるのは、間接話法の補足節で、時制の照応⁵のためにあらわれる用法である。たとえば、つぎの(5)の例をみよう。

(5) — Quelles sont les conclusions de votre enquête ?

— J'ai constaté qu'on **se mariait** très tôt **aujourd'hui**.

(佐藤 1990, p.48)

— 調査の結果はどんなものでしょうか。

— こんにちでは、ひとはたいへん早く結婚することが確認されました。

補足節内で、太字にしたように、半過去と、現在を指示する時間副詞 *aujourd'hui* が共起している。このことが意味していることは、動詞 *se marier* の事行そのものが半過去によって直接に過去時に位置づけられているわけではないということである。動詞 *se marier* の事行それ自体は、いうまでもなく、現在に位置づけられる。半過去がここで示していることは、主節の *j'ai constaté* によって示されている基準時が過去にあり、その過去時から *se marier* の事行が眺望されるということである。このように、半過去という時制が、事行そのものを過去に位置づけるのではなく、視点となる基準時を位置づけることになる事例が、叙想的時制である。

2.1.2. 破棄された予定をあらわす半過去

本稿の導入部でみた、破棄された予定をあらわす半過去も、叙想的時制とし

てとらえることができる。

- (6) [= (1)] Lundi prochain, il y **avait** un match ; mais je n'irai pas.
来週の月曜、試合があった。でもわたしは行かない。

1 節でものべたように、(6) では、「試合がある」という事行は、それ自体の時間軸上への位置づけとしては明白に未来のことであるが、「mais je n'irai pas」というように、試合に行く予定が破棄されていることから、「試合がある」という事行を眺望する視点が過去におかれることになる。その視点の過去性を半過去があらわしているのである。ここで重要なことは、いまでは観戦の予定を破棄した発話者の行動計画として事行をみるからこそ、視点が過去におかれるということである。

しかし、おなじ事態でも、見かたを変えるならば、発話者が行こうが行くまいが、試合そのものは開催されるのであるから、発話者の行動計画としてではなく、試合そのものの開催に重点をおいて言う場合は、つぎの (7)、(8) にみるように、現在形、単純未来形によっても表現されうる。

- (7) Lundi prochain, il y **a** un match ; mais je n'irai pas.
来週の月曜、試合がある (現在形)。でもわたしは行かない。
- (8) Lundi prochain, il y **aura** un match ; mais je n'irai pas.
来週の月曜、試合がある (単純未来形)。でもわたしは行かない。

しかし、(7)、(8) の場合は (6) とちがって、「mais je n'irai pas」(あるいはそれに類する文脈的情報) が必須ではなく、予定が維持されているか、破棄されているかにかかわらず、広く用いられる。

この点は、破棄された予定をあらわす半過去の変種ともいうべき、(9) の「追悼の半過去」(imparfait commémoratif) との対比においても理解できる。

- (9) [ヴァイオリニストの急死のニュースにつづけて]
Demain, c'**était** son concert d'adieu à Copenhague.
(Vuillaume 1990, p.17)
明日は彼の引退コンサートでした。

この例は、引退コンサートという予定が、ヴァイオリニストの急死によって、もはや永遠に実現不可能になったことを伝えることに眼目があるので、その予定を眺望しうる視点は、半過去のよってあらわされるような、ヴァイオリニストの死去以前の過去時におかれる以外にありえない。したがって、(6), (7), (8)の場合とちがって、つぎの(10), (11)のように、現在形や単純未来形を用いることはできないのである（文頭に付した#は、(9)とおなじ文脈では不可能であることを示す）。これらの相違もまた、視点の位置づけをあらわす叙想的時制ということから説明ができる。

(10) #Demain, c'est son concert d'adieu à Copenhague.

(11) #Demain, ce sera son concert d'adieu à Copenhague.

2.2. いわゆる「モダールな用法」の再編をめざして

2.2.1. 基本的仮説と本節の構成

一般的に「モダールな用法」に分類される半過去については、すでにのべたように、そのほとんどの部分を叙想的時制の概念を用いて説明することができるが、逆に、実は叙事的用法としてとらえなおすべきものもあるように思われる。本節では、いわゆる「モダールな用法」の再編をめざして、一部、叙事的用法をも含むかたちで考察してゆきたい。「モダールな用法」の再編は、前節で扱ったいわゆる「時制的用法」のなかにみられる叙想性とあいまって、半過去の用法全般に対する考察を前進させることになると考えられる。

以下で保持してゆく基本的な仮説は、つぎの(12)のようにまとめることができる。

(12) 半過去の「モダールな用法」に関する仮説

(I) 半過去は「過去」という時制的価値、「未完了相」というアスペクト的価値を基本的価値とし、それらをいわゆるモダールな用法においても保持している。

(II) モダールな用法の多様性は、その（未完了の）過去性がいかなる意味の実体に適用されるかの変異から出てくる。

(III) その変異は、つぎの(i)～(iii)の3つに大別することができる。それぞれを扱うセクションをあわせて示す。

(i) 動詞によってあらわされる事行への適用（叙事的用法）

- 間一髪の半過去 *imparfait d'imminence contrecarrée* ⇒ 2.2.2 節
- 語調緩和の半過去 *imparfait d'atténuation* ⇒ 2.2.3 節
- (ii) 先立つ他者の状態や潜在的発言への適用 (擬似対話的用法)
 - 接客の半過去 *imparfait forain* ⇒ 2.2.4 節
 - 愛玩の半過去 *imparfait hypocoristique* ⇒ 2.2.5 節
- (iii) 分岐的時間におけるひとつの分岐点への適用 (分岐的用法)
 - Si 節内の半過去 *imparfait après si* ⇒ 2.2.6 節
 - 非現実的連鎖の半過去 *imparfaits irréels (en enchaînement)* ⇒ 2.2.7 節
 - 遊び (の前) の半過去 *imparfait (pré-) ludique* ⇒ 2.2.8 節

2.2.2. 間一髪 of 半過去 (*imparfait d'imminence contrecarrée*)

「間一髪 of 半過去」とは、つぎの (13) にみるように、半過去が、実現すれすれの (たいていは、危険であるなど、のぞましくない) 事態が、かろうじて回避されたことを示す用法である。

(13) *Une minute de plus, le train déraillait.*

あと 1 分で、列車は脱線していた。(間一髪 of 半過去)

従来、この用法は、「反実仮想 of 半過去」(*imparfait contrefactuel*, Berthonneau et Kleiber 2006) などとよばれ、往々にして非現実性をあらわすモダールな価値がみつめられてきたが、渡邊 (2007 b) でのべたように、この半過去は、過去時において、事態が成立の過程にあったことを示す未完了アスペクトが前面に出てきた時制的・アスペクト的用法であると考えることができる。したがって、本稿の分類というならば、叙事的時制として理解するべきものであろう。

詳細な提示は渡邊 (2007 b) を参照していただきたいが、半過去は (14) のように、語彙的瞬間相の動詞に用いられたとき、半過去は単独でも (副詞句をとまわなくても) 事行の「未成立」をあらわすことができる。(14) においては、最後の « *elle respire toujours* » からはっきりわかるように、「彼女が死ぬ」という事態は成立していないのである。

(14) *Elle mourait.* Antoine aperçut, près des lèvres entrouvertes, deux

petits cheveux enroulés, plus légers que des fils de la Vierge, et qui par intervalles, se soulevaient : **elle respire toujours.**

(*Les Thibault*, t. 1, p.338)

彼女は死に瀕していた。アントワーヌは、なかばひらかれたくちびるのそばに、蜘蛛の糸よりも軽い、ふた筋のほそい巻き毛があるのを見つけた。それが時をおいて高まっていた。まだ息をしている。

(13) の場合も、半過去の「未成立」をあらわすはたらきにより、「脱線しかけていた」「脱線の過程を途中までは行っていた」ことが示されていると考えられる。そこから、条件法過去の例 (15) が脱線をまったくの非現実の世界としてえがくのにくらべて、「劇的な提示」になることも説明できるのである⁶。

(15) Une minute de plus, le train **aurait dérailé.**

あと1分で、列車は脱線していただろう。(条件法過去)

2.2.3. 語調緩和の半過去 (imparfait d'atténuation)

より詳細には渡邊 (2006) (2007 a) で考察したが、(16) のような語調緩和の半過去は、現実のレベルで、依頼に先立つ欲求や移動を、過去時に位置づけるはたらきを果たす叙事的時制であると考えられる。

(16) Je **voulais** vous demander un petit service. (Wilmet 1997, p.384)

ちょっとお願いしたかったのですが。

「相手をお願いをしたい」ということは、発話時点も変わらないのであるが、あえて視点を過去においてその欲求を眺望することを示し、欲求が現在まで持続していることは半過去の未完了性から推論されるにまかせるという方策をとることにより、欲求が直接断定される場合のぶしつけさを回避し、語調緩和の意味効果が出てきているのである。

(16) の例を、(17) のように、おなじく語調緩和の効果のある条件法現在で言いかえることは、まったく自然である。

(17) Je **voudrais** vous demander un petit service. ちょっとお願いしたい

のですが。

しかし、文脈によっては、条件法現在で言いかえることが不自然になる場合もある。つぎの例をみよう。

(18) [清掃員が、夜おそくに事務所にひとがいるのにおどろいて言う]

Je **venais** vider la poubelle. (Wilmet 1997, p.389)

ごみ箱のごみを回収にし来たのですが。

(19) # Je **viendrais** vider la poubelle.

(18) における語調緩和の半過去を、(19) のように条件法で言いかえることは不自然である。それはなぜかという点、本稿筆者の考えでは、(16) においては、「さきほどからお願いしたかったのですが...」というように、そして(18) においては、「さきほどからこちらに向かってまいりましたのは...」というように、いずれも時制的価値がみとめられからであると思われる。(18) であたえられている状況は、実際に発話者が事務所に来たときであることから、「さきほどからこちらに向かってまいりましたのは...」という解釈をとりはらうことがむずかしく、半過去のほうが自然になると考えられる。このことはまさに、語調緩和の半過去が、叙事的時制のレベルで過去時を指示していることを示しているのである。

2.2.4. 接客の半過去 (imparfait forain)

つぎに、接客の半過去について考えてみよう。接客の半過去とは、(20)、(21) のように、店員が顧客に用向きをたずねるときに用いられる半過去である⁷。

(20) [= (2)] Qu'est-ce qu'il vous **fallait** comme ruban ?

リボンは何がご入り用だったでしょうか。

(21) Qu'est-ce qu'elle **voulait**, la petite dame ?

(Berthonneau et Kleiber 1994, p.60)

奥さまは何がご入り用だったでしょうか。

前節でみた語調緩和の半過去とあわせて「丁寧の半過去」(imparfait de politesse) とよばれることもあり、渡邊 (2006) (2007 a) では同時に扱ったが、

今回着目している「叙事的時制か、叙想的時制か」という点では、ちがった特徴をもっている。

これらの用法における半過去の使用は、かねてより顧客には欲求や必要性があったという過去性に対応している。実際、(20) や (21) の文を用いるにはタイミングの制約があり、到着直後の客には使うことができず、いくら客の側に待ち時間があつた場合にしか使えないのである。すなわち、半過去の時制的価値によって指し示されるだけの時間幅が必要であるということである。その意味では、この用法も叙事的時制として扱ってよいと即断したくなるかもしれない。しかし、接客の半過去は、ただ顧客の欲求や必要性そのものを過去に位置づけているだけではない。その欲求や必要性に店員が持続する注意を向けていたことを標示することが、入念な接客を意味することになり、丁寧さの意味効果が出てくるのである。したがって、接客の半過去は、顧客の欲求や必要性を直接に過去時に位置づけているのではなく、店員の視点によってとらえなおされた限りでの顧客の欲求や必要性を位置づけるという間接性がある。この、視点を介した過去時への位置づけは、まさに叙想的時制の特徴であるといえる。

加えて、この用法には、Barceló et Bres (2006) も指摘しているように、擬似対話的 (quasi-dialogique)、ないしポリフォニー的 (polyphonique) な性格が認められる。明示的に言語化された発言としては、店員による接客の半過去を用いた発言が対話の冒頭にあたるかもしれない。しかし、その場合でも、顧客による明示的発言は先立っていないくても、店員が顧客の欲求や必要性を推測するに足る顧客の素振りや徴候は先立っているのである。そうした対話者の言語外的な徴候をうけ、それらを指し示すかたちで半過去が用いられているのである。

(21) のように、眼前の対話者に対して 3 人称代名詞を用いることも注目されるが、これもまた、接客の半過去のポリフォニー的な性格からくるものと思われる。詳細は渡邊 (2006) (2007 a) を参照されたい。

2.2.5. 愛玩の半過去 (*imparfait hypocoristique*)

愛玩の半過去とは、つぎの (22)、(23) にみるように、赤ちゃんや動物など、ことばを話せない相手にむかって、基本的には愛撫的 (*caressant*) な発言をするときに用いられる半過去である。

(22) Qu'est-ce qu'il **était** mignon, mon bébé !

(Berthonneau et Kleiber 1994, p.60)

赤ちゃん、なんてかわいいんでしょ！

(23) Il **avait** beaucoup de vilaines puces, le pauvre toutou...

(Confais 1990, p.138)

かわいそうなワンワンにきたないノミノミがいっぱいいる ...

すでにことばを話せる年齢の対話者には、(24) のように、たわむれにしか使えない。

(24) [12歳の息子に] Père — Il **faisait** un gros caprice mon garçon. Il **était** fâchéfâché.

Fils — Oh ça va ! arrête de me parler comme à un bébé !

(Brès 2003, p.117)

父—ごきげんななめだねえ坊やちゃん。オコリオコリしてるんだね。

息子—やめろよ！ 赤ちゃんに言うみたいにしやべるなよ！

幼い子どもが話すたどたどしい口ぶりをまねる場合もある。興味深いことに、実際にはまだ話せない赤ちゃんに対して言うのであるから、目の前の赤ちゃんの口ぶりをまねているわけではなく、子どもっぽさのステレオタイプにしたがっているのである⁸。つぎの(25)では、c'est ⇒ ch'est ; ça ⇒ cha ; brisé ⇒ brijé といった硬口蓋化 (/s/ ⇒ [ʃ] ; /z/ ⇒ [ʒ] の変換) で子どもっぽさを出している。

(25) [泣いている男の子に] Ch'est un pauvre bébé cha... il **avait** le coeur brijé. (Bétécher, cité dans Brès 2003, p.119 et dans Barceló et Brès 2006, p.62)

かわいちょうな赤ちゃんでちゅねえ、かなちくてたまらないのね。

愛玩の半過去は、赤ちゃんや動物の直前のしぐさや徴候から、話せるなら言っていたであろうことを代わりに言語化することが基本である。Ch'est un pauvre bébé cha, chenchien, puces, fâchéfâchéなどの幼児語を使うことがその証拠である。「直前の徴候」ということは、愛玩の半過去が発せられる時点と、それがえがきだす事行の時点とのあいだに、わずかなりとも時間差があ

るということであり、その時間差が半過去の示す過去性と対応しているのである。

愛玩の半過去の叙想性は、半過去が事行そのものを直接過去時に位置づけるのではなく、赤ちゃんや動物のしぐさや徴候を、発話者がとらえなおしたものを位置づけている、というところにある。

また、3人称の使用はここでも、接客の半過去と同様、ポリフォニー的である。赤ちゃんや動物をえがき出す際、あたかも演劇の登場人物のように演出する効果があるといえよう。

愛玩の半過去は、(26)のように、長い連鎖をかたちづくることもある。

- (26) Ça c'est un beau chienchien, ça. Maman l'**avait** brossé ce matin. Elle **avait** bien brossé les poipoils, maman. Il **avait** plus de pupuces. Il a plus de pupuces, vous savez... Aïe, on **avait** mordu papa ! ... Oh, c'est un vilain chienchien... Et ça, qu'est-ce que c'**était** ça ? Ça c'est la baballe au chienchien.

(R. Pierre et J.-M. Thibault, cité dans Rosier 2005, p.126)

すてきなワンワンだねえ。ママンが今朝ブラシをかけてくれたもんね。ママンがしっぽしっぽをよーくブラシしてくれたもんね。もうノミノミはいないよ。あいたっ、パパを噛んじゃった！ わるいワンワンだねえ。で、これはなあに？ これはワンワンのボーボー。

こうした例に Rosier (*ad loc.*) は、「演劇的次元」(dimension théâtrale) をみとめており、さらに推しすすめて、「腹話術の半過去」(imparfait ventriloque) というたいへん興味深い概念を提唱している。愛玩の半過去にみられるポリフォニー性は、実は半過去が自由間接話法、間接話法で基調となる時制であるということとも広く関連づけることが可能であり、半過去が言説の他者性を広汎に示しうるとしている。

しかし問題は、なぜ半過去が言説の他者性を示しうるかということである。それはやはり、叙想的時制の概念を用いて説明ができると思われる。叙想的時制が時間軸上に位置づけるのは、事行そのものではなく、事行を眺望する視点、あるいは事行をとらえなおした概念であった。その視点や概念化がどのような主体によってになられるかに応じて、言説の他者性が出てくるものと考えられるのである。

2.2.6. Si 節内での非現実用法 (emploi irréel après si...)

Si 節 (仮定節) 内で半過去が用いられるのは、主節 (帰結節) で条件法現在が用いられるのとの相関におかれて、全体として現在、または未来の非現実の状況をあらわす用法が典型的である。(27) のような例がそれにあたる。

- (27) Quand la viande se vendra 50 centimes à Buenos-Aires et 50 centimes à Paris, une plus grande somme de bien-être sera réalisée sur la terre. Si la viande **pouvait** coûter le même prix sur tout le globe, le bien-être **serait** encore plus grand.

(J. Novicow, *Les gaspillages des sociétés modernes*, p.47)

食肉がブエノスアイレスでも 50 サンティーム、パリでも 50 サンティームで売られるときには、地球上により大きな幸福が実現することとなろう。食肉が地球のどこでもおなじ価格になりうるなら、幸福はいつそう大きくなるだろう。

この構文における半過去は、条件法と相まって反実仮想をあらわすことから、伝統的には反過去のモデルな用法の最たるものとされてきた。しかし、近年、Gosselin (2005), Barceló et Bres (2006) のように、この用法の半過去にもあえて過去性を積極的にみとめようとする方向性での研究がいくつか公刊された。以下、それらを簡単に概観してみよう。

Gosselin (2005) は、si 節があらわすのは、単なる可能性ではなく、可能性を確認する時点以降の時点に実現するような可能性、すなわち「前望的可能性」(possibilité prospective) であるとする。そして、半過去は、その「前望的可能性」を過去時に位置づけることから、結果としてその可能性の実現・非実現が問題になるのは現在や未来である、とする。その論拠として、Gosselin はつぎのような一連の言いかえを提案している。

- (28) Si Pierre a vu Marie, il a dû lui raconter son aventure.

(Gosselin 2005, p.167)

ピエールがマリーに会った (複合過去) なら、彼の冒険の話をしたにちがいない (複合過去)。

- ⇒ (29) Si c'est vrai que Pierre a vu Marie, il a dû lui raconter son

aventure. (*idem*)

ピエールがマリーに会った（複合過去）のが本当なら（現在）、彼の冒険の話をしたにちがいない（複合過去）。

(30) Si Pierre était riche, il achèterait une voiture. (*ibidem*, p.168)

もしピエールがお金持ちなら（半過去）、彼は車を買うだろうに（条件法現在）。

⇒ (31) Si c'était vrai que Pierre est riche, il achèterait une voiture.

(*idem*)

もしピエールがお金持ちだ（現在）というのが本当なら（半過去）、彼は車を買うだろうに（条件法現在）。

⇒ (32) ?? Si c'est vrai que Pierre était riche, il achèterait une voiture.

(*idem*)

もしピエールがお金持ちだった（半過去）というのが本当なら（現在）、彼は車を買うだろうに（条件法現在）。

Gosselin の所説では、(28) を (29) のように言いかえるときには、(29) の言いかえのなかでモダリティを明示する部分である « c'est vrai » は現在形におかれるのに対して、ここで問題となる si + 半過去を用いた (30) を言いかえるときには、(31) のようにモダリティ部分を « c'était vrai » と半過去にするのが自然であり、(32) のように、事態部分を半過去、モダリティ部分を現在で言いかえるのは不自然である。このことは、半過去が假定節の事行に対してではなく、その事行にかかるモダリティ（すなわち、前望的可能性）に対してはたらいっていることを示している、とする。

しかしながら、(31) の言いかえはメタ言語として熟していない、という批判をすることが可能であると思われる。実際、(31) のなかで、メタ言語的に用いられているはずの半過去 « si c'était vrai » も、実はもともとの分析対象であった « si Pierre était riche » と同じ用法のままではなかるうか。すなわち、説明の対象をそのまま説明の道具として用いていることになり、説明になっていないのである。

つぎに、Barceló et Bres (2006) について見てみよう。Barceló et Bres (2006, pp.69-78) は、対話性 (dialogisme) の概念を導入することで、si 節中の半過去を時制的に説明しようとしている。すなわち、si 節の内容は、発話者による断定の対象にならず、他者性をおびている。他者の言説をうけなおす際、それ

が自己の発話に先立っているという意味で過去性があるため、半過去が用いられるという説明である。その他者性は多くの場合直接には観察できないが、つぎのような例では、対話者の発言の反復として、端的にあらわれているとする。

(33) Interaction familiale

Mère — La prof de math dit que tu écoutes pas en cours.

Fils — (mimant l'intonation de sa mère) J'écoute pas en cours ! j'écoute pas en cours ! Si j'**écoutais** pas en cours je serais largué et mes notes... (*ibidem*, p.72)

家庭での会話

母 — 数学の先生が、おまえが授業中聴いていないっておっしゃっているよ。

息子 — (母親の音調をまねて) 授業中聴いていないって！ 授業中聴いていないって！ もし本当に授業中聴いていなかったら、ぼくは追い出されているだろうし、点数だって……

実は, Barceló et Bres (2006) は, 時制のモダールな用法のほとんどすべてを, 対話性によって説明しようとする野心的な研究である。しかし, その接近法の適切性は, 適用される事例によって大きくことなるように思われる。たとえば, 2.2.5 節でみた愛玩の半過去のような事例を説明するときにはたいへん説得的であるが, (33) のような周辺的なケースをひきあいに出して, si 節中の半過去を説明しようとするのは無理があるように思う。

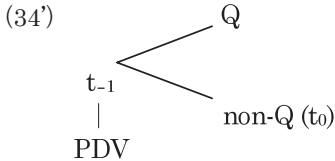
これらの先行研究への代案として, 本稿筆者は, 渡邊 (2008) において, 「分岐的時間」(temps ramifié) の概念を用いた説明を対置した。詳細は渡邊 (2008) をごらんいただきたいが, 分岐的時間とは, 時間の流れに対するひとつのとらえかたであり, ある命題 (Q とする) が真になるか (Q), 偽になるか (non-Q) に応じて, ことなる可能世界を構築するかたちで枝わかれして進行する時間の表象である。「人生のわかれ道」「岐路に立たされる」などの隠喩表現はありふれており, そうした表現の存在にかんがみても, 分岐的時間は, 言語的には根拠があると思われる。こうした分岐的時間の表象を, いま問題となっているタイプの条件文に適用すると, 以下のようなになる。(27) の例文を (34) として再録する。

- (34) [= (27)] Si la viande **pouvait** coûter le même prix sur tout le globe [= P], le bien-être **serait** encore plus grand [= Q].

(J. Novicow, *Les gaspillages des sociétés modernes*, p.47)

食肉が地球のどこでもおなじ価格になりうるなら [= P], 幸福はいつそう大きくなるだろう [= Q]。

(34) で si 節の命題を P, 帰結節の命題を Q と表記しよう。こうした例は「過去 ((34) を図式化した (34') の t_{-1}) からみた可能世界」として説明できる。ここで、現実世界 (t_0 における non-Q) とは異なる可能世界 (Q となる世界, 条件法現在 *pourrait* によって示される) を構築するために過去 t_{-1} に遡行しなければならないのは、可能世界を生成しうる分岐が時間的に先立っているという、分岐的時間の構造的要請による。日常語で言いなおすと、「今にいたる経緯 (すなわち過去 t_{-1} における経緯) が違っていればありえた世界」として Q となる世界が構築されるのである。



その際、si 節内で用いられている半過去も、その可能世界への分岐の起点となる過去 (t_{-1}) をさしめず時制的用法として説明することができる。現状とはことなる可能世界を展望するべく、それを生成しうる分岐点 t_{-1} に視点をおくことによって、仮定をのべることができるのである。この用法の半過去は、過去時 t_{-1} に P そのものを位置づけるのではなく、P を眺望する視点 PDV を位置づけている (そのため、(34') の図のなかには、P そのものが占める位置はない) のであり、やはり叙想的時制のひとつの類であるとみなすことができる。

2.2.7. 非現実的連鎖の半過去 (*imparfaits irréels (en enchaînement)*)

2.2.2 節でみた「間一髪半過去」においては、半過去そのものは単独で用いられていたのに対し、本節で扱う半過去はすくなくともふたつの生起が連鎖におかれており、そのことによって解釈の変異が生じる。例文で確認してゆこう。

- (35) On **appelait** à voter non, Maastricht **c'était** dans la poche. (texte associé à un dessin de Passin paru dans le journal *Le Monde* du 1^{er} septembre 1992, cité dans Lebaud, 1994, p.218)

反対投票をよびかけていたら、マーストリヒト条約批准は余裕で通っていたよ。

こうした半過去の並置的連鎖による条件文が、条件文一般のなかで占める位置は、かなり特殊なものである。渡邊 (2004) では、(35) を、(36) にみるような条件法の並置的連鎖による条件文と比較しながら、(37) のようにのべた。

- (36) **J'aurais** un peu d'argent, je m'**achèterais** l'intégrale de Mozart.

(Riegel et alii, 1994, p.318)

いくらかお金があれば、モーツアルト全集を買うだろうに。

- (37) 「[(35)] は、文脈に（この例の場合は言語外的文脈に）緊密に依拠してしか使えない文型である。マーストリヒト条約への批准を国会で採決したとき、社会党が賛成投票を呼びかけた結果（あるいは、風刺漫画のイロニックな趣旨からいえば、呼びかけたにもかかわらず、かろうじて）、可決されたというニュースを背景としたうえで、ふたりの社会党代議士が風刺漫画に描かれ、[(35)] のように言っているのである。[(35)] は、こうした明確な背景がなければ用いることができない形であり、その点は、[(36)] のように、いわば独立した空想とは異なっている。」（渡邊 2004, p.215）

このような並置構文においては、si... 節を用いた条件文とちがって、「仮定＋帰結」といった意味はどこにも明示されていない。それが「仮定＋帰結」として解釈されるのは、(35)、(36) のように、明確に二肢的構造 (structure bi-partite) を呈する文の場合だけである。つぎの (38) のように、文全体の構造が二肢的でないときは、半過去の連鎖する部分 « le prof te **piquait**, tu **avais** zéro » については、単なる継起 (succession) の解釈になる。

- (38) [カンニングをした同級生に]

Tu as de la chance. Une seconde de plus, le prof te **piquait**, tu **avais** zéro... (Maejima 2007, p.1)

おまえ、ついてるよ。あと1秒で先生にばれて、零点になってたよ。

二肢的構造の文で、「假定+帰結」として解釈されるとき、半過去の過去性は、前節 2.2.6 で扱った si 節内の半過去と同様、分岐的時間 (temps ramifié) における分岐点の過去性にかかわるものとなる。本節で扱っている事例は、si 節の場合とちがって、(35) で « On **appelait** à voter non » という假定の部分が、現在の假定ではなく過去の假定をあらわすところが違っているが、そもそも過去時に位置づけられているのは事行そのものではなく、あくまでもそれを眺望する視点であることを思いおこせば、その違いは問題ではないことがわかる。したがってこの事例も、叙想的時制の一例とみなすことができる。

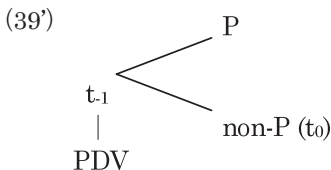
2.2.8. 遊び (の前) の半過去 (imparfait (pré-)ludique)

最後の事例として、子どもが遊びの状況設定に用いる「遊び (の前) の半過去」をみておこう。

(39) Toi tu **étais** le gendarme et moi le voleur. (Wilmet 1997, p.384)

きみが警察役で、ぼくが泥棒役としよう。

先行研究はこの用法の半過去について、モダールな用法という説をとっているものが圧倒的であるが、分岐的時間による扱いは十分可能であると考えられる。遊びの世界の人物設定や状況設定は、現実世界 t_0 ではありえないことなので、それを構築するために、分岐 t_1 にさかのぼり、そこから現実世界とはちがった可能世界 (ここでは遊びの世界) に P を位置づけているのである (P は、(39) に即していうと、< toi - être gendarme > という命題である)。そして、ここでもまた、半過去は P を直接過去に位置づけるのではなく、分岐的時間において、P を眺望する視点 PDV を、過去時 t_1 に位置づけているのである。まとめると、図 (39') のようになる。



以上のように考えると、遊び（の前）の半過去も、叙想的時制のひとつの類として理解することができる。

2.3. 叙想的時制に関するまとめ

以上、2 節全体を通じて、叙想的時制の事例研究として、半過去の多くの用法が、叙想的時制の概念を用いてとらえることができることを見てきた。いわゆる「時制的用法」のなかでは、時制の照応の半過去（2.1.1 節）、破棄された予定をあらわす半過去（2.1.2 節）、そして、いわゆる「モダールな用法」のなかでは、接客の半過去（2.2.4 節）、愛玩の半過去（2.2.5 節）、si 節内の半過去（2.2.6 節）、非現実的連鎖の半過去（2.2.7 節）、遊び（の前）の半過去（2.2.8 節）が、叙想的時制としてとらえなおすことができるとした。一方、従来「モダールな用法」として分類されてきた間一髪半過去（2.2.2 節）、語調緩和の半過去（2.2.3 節）は、叙事的時制とみなすことができるとした。これにより、従来ときに曖昧であった「時制的用法 / モダールな用法」という二分法に対して、時制がなにを時間軸上に位置づけているかという観点から、いっそう明確な用法の規定ができると考える。もちろん、おなじ叙想的時制のなかにも、細部を比較すればさまざまな相違はあるものの、基本的に、半過去におかれた動詞の事行を眺望する視点を過去に位置づけるという点は共通していたといえよう。

3. 叙想的アスペクト

つぎに、叙想的アスペクトについて考えてみよう。以下では 3.1 節で、本稿で依拠するアスペクトの基本的図式を確認したあと、3.2 節で半過去の事例、3.3 節で現在分詞の事例を検討する。

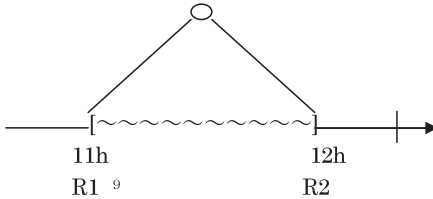
3.1. アスペクトの基本的図式

本稿では、Desclés (1995) の理論に着想を得て提案された、Novakova (2001) によるアスペクトの図式化を参照することにしたい。下記に (40)～(42) として引用するが、例文、図ともに Novakova (2001) のものである。ただし、細部は一部簡略化している。彼女は、(40) にみられるような、フランス語の単純過去が典型となる全体的アスペクト (aspect global), (41) のような、フランス語の半過去が典型となる未完了アスペクト (aspect inaccompli),

(42) のような、フランス語の複合過去が典型となる完了アスペクト (aspect accompli) の 3 つを区別している。

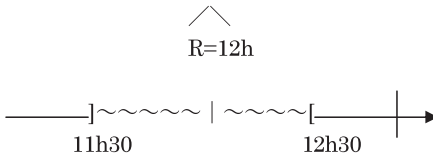
(40) **aspect global** : vision synoptique (Novakova 2001, p.216)

Ce jour-là, il **déjeuna** de 11h à 12h. (その日、彼は 11 時から 12 時にかけて昼食をとった)



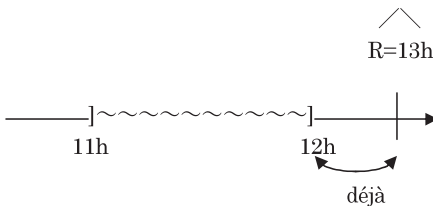
(41) **aspect inaccompli** : vision incidente (*ibidem*, p.217)

À midi, il **pleuvait**. (正午には、雨が降っていた)



(42) **aspect accompli** : vision rétrospective (*ibidem*, p.218)

Il a déjà **déjeuné**. (彼はすでに昼食をすませた)



このアスペクト論は、事態そのものの時区間が、それ自体で始点・終点が明確になっていることにより「閉じている」(Novakova の図では、時区間を [~ ~] とえがくことにより表示される) か、それとも始点・終点が明確になら

ないことにより「開いている」(Novakova の図では、時区間を] ~ ~ ~ [とえがくことにより表示される)か、ということだけでなく、事態そのものの時区間のどこを注目しているかという、「視点の時区間」をも区別するものである。おおまかな図式化においてはいずれもひとしく「完了相」とされる(40)と(42)は、前者が視点の時区間が事態の時区間と完全に一致すること、すなわち総覧的視点(vision synoptique)によって特徴づけられるのに対して、後者が事態の時区間の終点の外部に後続する結果状態に視点がおかれること、すなわち回顧的視点(vision rétrospective)によって特徴づけられる、というかたちで区別される。ただし、本稿でも、いわば未完了相の補集合として、これらをあえて区別しないときは、「完了相」ないし「完了アスペクト」とよぶことにする。一方、(41)の未完了相は、事態そのものの時区間が開いていること(のみ)によってではなく、視点の時区間が事態の時区間の中途にあたる一部しか対象としていないこと、すなわち入射的視点(vision incidente)¹⁰によって特徴づけられる。中途のみを視野におさめていることにより、事態はその内部から、いわば、その真っただなかでえがき出されることになるのである。

このように、事態そのものの時区間が「開いている」か、「閉じている」かだけでなく、その時区間の内部、あるいは外部のどこに視点をおいているかという区別もとり入れたアスペクト論は、本稿で議論してゆく叙事的アスペクトと叙想的アスペクトとの区別にも直接役立つものであり、さらには、5節で考察する認知モードの問題ともつながっているなど、より広い射程をもっていると予想される。

3.2. 半過去と叙想的アスペクト

以下では、叙想的アスペクトに関する第1の事例研究として、フランス語の半過去をとりあげる。半過去には、叙想的アスペクトが広くみとめられると考えているが、なかでも、そのあらわれが端的に見やすくなっているのは、事態そのもののアスペクトは完了相であるにもかかわらず、未完了アスペクトをあらわすはずの半過去が使われるいくつかの場合であろう。以下では、そのような事例を中心に検討してゆこう。

3.2.1. 絵画的半過去(imparfait pittoresque)

まずは、本稿導入部でも少しふれるところのあった、絵画的半過去とよばれる用法に着目してみよう。

- (43) [= (3)] La clef **tourna** dans la serrure. Monsieur Chabot **retirait** son pardessus qu'il **accrochait** à la porte d'entrée, **pénétrait** dans la cuisine et **s'installait** dans son fauteuil d'osier.
 鍵が鍵穴のなかで回った。シャポー氏は外套を脱ぎ、それを入り口のドアにかけるのだった。そして、台所に入り、柳のひじかけいすに腰をおちつけるのだった。

すでにのべたように、この例では、物語の前景 (premier plan) となる、継起するできごとが語られているので、通常の文体であればいずれも単純過去を用いるはずのところである。それにあえて半過去を用いることで、いわば、情景を静止画でえがきだすような効果が生まれ、「意味のある行動」というニュアンスや、探偵小説にふさわしいサスペンス効果がえられる。こうした場合、事態そのもののアスペクトを示すことを犠牲にして、その事態をどのように眺めているかというアスペクト、すなわち本稿でいう叙想的アスペクトを標示するという機能を半過去がなっていると考えることができる。3.1 節でみた Novakova (2001) の図式化でいうと、事態そのものの時区間はむしろ閉じているのであるが (この点、典型的な未完了アスペクトの図式 (41) とは部分的にことなる)、半過去がもたらす視点の態様が入射的視点であることから、本来は点括的であるはずの事行を、いわば無理やりに、内部から眺めるようにしているのである¹¹。

3.2.2. 結末の半過去 (imparfait de clôture, imparfait conclusif)

つぎに、結末の半過去とよばれる用法をみよう。

- (44) [= (4)] Comme elle avait été à l'Opéra, une nuit d'hiver, elle rentra toute frissonnante de froid. Le lendemain elle toussait. Huit jours plus tard, elle **mourait** d'une fluxion de poitrine.
 ある冬の夜、彼女はオペラに行ってきたので、すっかりこごえてかえってきた。翌日、彼女は咳をしていた。1週間後、彼女は肺炎で死ぬのだった。

この例において、「彼女が死んだ」という結果は、元来は完了相の事態であり、これを物語のなかで提示するとき、標準的な文体では単純過去が用いられ

るはずである。それにもかかわらず、あえて半過去を用いることにより、事態の内部に視点をおいて眺めたような形で、あたかもスローモーションのようにえがき出される（このことは、絵画的半過去と同様である）こととなり、それによって、「重大な結果」という意味効果もたらされるのである。したがって、この例もまた、事態そのものの完了アスペクトの標示をあえて犠牲にして、その事態を重大な結果としてとらえなおすという見かたを規定するためのアスペクト標示を半過去がになっていると考えられるのである。

3.2.3. 説明の半過去 (*imparfait d'explication*)

「説明の半過去」とは、Le Bidois et Le Bidois (1935, t.1, p.434, §.730) の用語であり、つぎの例のように、半過去で示された事態が、文脈上、他の事態に対する事情や理由の説明になっている用法である。

(45) Il sursauta : la porte s'**ouvrait**.

(Vercors, cité dans 朝倉・木下 2002, p.257)

彼は（おどろいて）とび上がった。とびらが開いたのだ。

この例において、半過去におかれている「とびらが開いた」という事態そのものは、「彼がとび上がった」という事態とおなじく、全体的（総覧的）アスペクトでとらえられるはずであり、それが叙事的アスペクトの次元である。

しかし一方で、「とびらが開いた」という事態は、この場合、「彼がとび上がった」という、物語の前景をなすできごとに対する事情説明や理由であることから、背景 (*arrière-plan*) としてとらえられることになる。背景というものは、それ自体を直視するものではなく、おもな筋をみてゆくなかで自然に目に入ってくるような性質のものであるので、その全貌を視野におさめるのではなく、入射的視点によってみるものである。したがって、入射的アスペクトをあらわす半過去が使用されるのである。これが叙想的アスペクトの次元である。

このように、説明の半過去においても、事態そのもののアスペクト（叙事的アスペクト）をあえて犠牲にして、叙想的アスペクトの標示を優先させている場合がある。

なお、説明の半過去では、いつも叙事的アスペクトが完了的なものを入射的にとらえなおすという形で半過去があらわれるわけではない。説明の半過去におかれている事行が、もともと叙事的なレベルでも未完了的である場合のほ

うが実は多い。たとえば、つぎのような例がそれにあたる。

- (46) Jean se mit en route dans sa nouvelle Mercedes. Il attrapa une contravention. Il **roulait** trop vite.

(Molendijk 1993, cité dans Berthonneau et Kleiber 1993, p.58)

ジャンは新しいメルセデスで出発した。交通違反をくらった。スピードを出しすぎていたのだ。

このような場合、「ジャンがスピードを出しすぎていた」というのは、叙事的にも継続相であり、未完了相である。しかし、それにくわえて、事情や理由の説明であることにより、叙想的アスペクトとしても未完了相をおびることとなっている。これらふたつの次元でのアスペクトは、(46)のような例では、矛盾することなく共存しているが、半過去は、あえてどちらかという、叙想的アスペクトを標示することに力点をおいていると思われる。なぜなら、談話レベルでの全体的な解釈としては、前文とのかかわりで理由をのべることにこそ半過去の使用動機があるからであり、そのとき、叙事的アスペクトは、叙想的アスペクトといういっそう広い機能のなかに、いわば、とり込まれていると考えられるからである¹²。

3.2.4. 関係節中の半過去 (*imparfait dans la relative*)

つぎに、関係節中でみられる、特徴的な半過去の用法についてみてゆこう。まず、小説の題名である (47) を検討しよう。

- (47) *L'homme qui **plantait** des arbres* (Jean Giono)

『木を植えた男』(ジャン・ジオーノの小説の題名)

これについては、半過去が未完了アスペクトをあらわすからといって、日本語で『木を植えていた男』としたのでは、なんのことかわからなくなってしまふ(あたかも、木を植えている最中になにごとかが起きる物語であるかのようである)。そうではなく、主人公ブフィエ氏が、荒れた土地に30年にわたって木を植えたという既成の事実を、彼の業績とみなし、それによって彼を特徴づけようとする際、その特徴の状態性によって、事態そのもののアスペクト(叙事的アスペクト)とはことなる叙想的アスペクトが付与されているのである。

この用法については、春木（2000）が、つぎのふたつの例文をひきながら、あとの（50）のように言っている。

- (48) J'ai rencontré un réfugié qui **arrivait** du Kosovo. (春木 2000, p.85)
 コソヴォからの（「コソヴォからやってきた」）難民に出会った。
- (49) Louis Gillet, qui **mourait** à Paris le 1^{er} juillet, a laissé une oeuvre considérable. (Sten 1952, p.130, cité dans 春木, *ad loc.*)
 6月1日にパリで亡くなったルイ・ジレは、かなりの作品を残した。
- (50) 「[(48)] や [(49)] のような例では、arriver や mourir といった完了的事態によって対象を特徴づける手段として、関係節と半過去が用いられていると考えられる。関係節というのは、非制限的な場合は別として、先行詞をヘッドとする名詞句の構成要素であり、統語的にもすぐれて名詞句に依存・従属している要素であり、同じ属性付与という働きをする場合でも<主語-述部>という構造以上に属性付与が前面に出てくる構造である。」 (*ibidem*, p.86)

ここにいう「属性付与」とは、関係節中の動詞事行によって先行詞を特徴づけるということである。したがって、叙事的アスペクトとしては完了的な事態であっても、それが「特徴」ないし「属性」としてとらえなおされた結果、叙想的アスペクトの次元において、未完了相をあらわす半過去が用いられているということである。

3.3. 現在分詞と叙想的アスペクト

つぎに、叙想的アスペクトのもうひとつの事例研究として、現在分詞について考察してゆくことにしよう。半過去のような定形とちがって、絶対時制としての機能をもたない現在分詞においては、純粹にアスペクト的な機能のあらわれが観察できるからである。

現在分詞については、すでに渡邊（2011 b）で詳細に考察したが、その基本的な機能は、本稿 3.1 節でみた「入射的アスペクト」を標示することであるといえる。そして、現在分詞が標示する入射的アスペクトが、事態そのものに適用される場合、すなわち叙事的アスペクトとして機能する場合も、もちろん少なくないが、叙想的アスペクトをあらわす場合も局所的に観察される。以下ではそうした事例をみてゆくこととしたい¹³。

3.3.1. 原因・理由をあらわす前置用法

まず、現在分詞が主節に対して前置されたとき、主節の事態の原因・理由をあらわす用法について考えてみよう。

- (51) **Trébuchant** sur le bord de la pelouse, Wolf se rattrapa à Foravril.
 (Vian, cité dans Gettrup 1977, p.256)
 芝生のへりですつまづいて、ヴォルフはフォラヴリルに取りすがった。

このような例の場合、現在分詞節と主節は継起的な関係にあるため、事態そのもののアスペクトとしては完了的であるはずであるが、動詞 *trébucher* は、本質的に「入射的アスペクト」を標示する現在分詞におかれている。一見したところでは矛盾するように思えるこの例のアスペクトは、まさしく、叙事的アスペクトと叙想的アスペクトの相違をかぎとすることで説明がつくものである。叙事的アスペクトとしては、もちろん完了的事態なのであるが、叙想的アスペクトとしては、その事態が、原因・理由としてとらえなおされることにより、前景である主節の事態に対する背景としてはたらくようになり、入射的アスペクトのもとでとらえられることになるのである。

3.3.2. 結果をあらわす後置用法

つぎに、たとえば以下の (52), (53) のように、主節に対して後置され、結果をあらわす現在分詞をみておこう。

- (52) Les chocs à répétition ont perturbé les circuits de refroidissement des réacteurs de deux centrales nucléaires dans la région de Fukushima, **entraînant** une élévation anormale du niveau de radioactivité. (*Libération*, le 12/3/2011)
 くりかえされた衝撃が、福島にあるふたつの原子力発電所の原子炉の冷却装置の循環をさまざまに、放射能のレベルの異常な上昇をもたらした。
- (53) L'appareil, qui faisait la liaison Rio-Paris, s'était abîmé en pleine nuit dans l'Atlantique, le 1^{er} juin 2009, **causant** la mort des 228 passagers. (*Libération*, le 6/5/2010)

リオデジャネイロ・パリ間をむすんでいたその飛行機は、2009年6月1日の夜中に、大西洋に沈み、228人の乗客が死亡したのだった。

この用法については、3.2.2節で考察した「結末の半過去」とのアナロジーによって理解することができる。現在分詞であらわされている結果は、いずれも重大なものであり、結末の半過去と同様、その重大さゆえに、「入射的視点」によって、事行をその真っただ中からえがき出すという機能を現在分詞が果たしていると思われる。結果が、叙事的アスペクトの次元では完了的な事態であるにもかかわらず、叙想的アスペクトの次元において「入射的視点」からとらえなおされることによって、それがあたかもスローモーションのようにえがき出される（このこと自体は、絵画的半過去全般と同様である）ようになり、重大な結果という意味効果がもたらされるのである。

3.3.3. 付加語的用法 (*emploi épithétique*) の一部で

以下では、現在分詞が付加語的に機能している場合のうち、現在分詞におかれた動詞の事行そのもののアスペクトは完了的であるものについて考えてみよう。つぎの(54)の例がそれにあたる。

- (54) Nul ne peut échapper à son destin et celui des possesseurs de l'Inde a toujours été d'être dépossédés par des **gens venant de** l'Asie centrale, comme, dans le cours des siècles, nous le montre l'histoire du Turkestan.

(A. Durrieux et R. Fauvelle, *Samarkand, la bien gardée*, p.288)
 なにもものも運命からのがれることはできない。インドの持てる者たちの運命は、いつも、中央アジアから来たひとびとに篡奪されることであった。それはちょうど、何世紀ものあいだ、トゥルキスタンの歴史が示すとおりである。

このような例では、事態そのもののアスペクトは完了相であるが、ここでは、現在分詞句 *venant de l'Asie centrale* は、*des gens* に属性付与をしているのであり、その属性を介して、状態的に機能しているのである。したがって、叙想的アスペクトの次元での未完了相を現在分詞が標示しているといえる。属性付与という点で、この事例は、3.2.4節で考察した、関係節中での半過去の場

合ときわめて類似している。

3.3.4. 絶対分詞構文 (*construction participiale absolue*) の一部で

絶対分詞構文とは、現在分詞が、明示された独自の（主節とはことなる）主語をもつ場合である。叙事的な次元では、この構文のなかでの現在分詞のアスペクトはさまざまであるが、つぎの(55)の例のように、時間的な前後関係に重きがおかれ、継起関係が認められる場合、叙想的アスペクトがきわだって観察できる。

- (55) On connaît la suite : Grappin **fermant** Nanterre pour mâter [*sic*] les « enragés », ceux-ci **envahissant** la Sorbonne, le recteur Roche **appelant** la police. Les étudiants évacuèrent la Sorbonne et un grand nombre furent arrêtés à la sortie.

(S. de Beauvoir, *Tout compte fait*, p.469) ¹⁴

そのあとのことは知られている。グラパンが「過激派」をしずめるためパリ大学ナンテル校を閉鎖し、「過激派」はソルボンヌを占拠し、ロッシュ学区長は警察を呼んだ。学生たちはソルボンヌを明け渡したが、出口で多くが逮捕された。

この例は、時間軸にそって展開される語りのながれのなかで、継起するできごとが、Grappin **fermant**... ceux-ci **envahissant**... le recteur Roche **appelant** というように、3つの絶対分詞構文で順に示されており、そのあとの、Les étudiants **évacuèrent**... un grand nombre **furent arrêtés**... という単純過去による継起的なできごとの語りへと続いていっている。したがって、この例もまた、叙事的な次元では完了相の例である。

しかし、叙想的なレベルでは、(55)で現在分詞が連鎖する部分は、それぞれの事態を「入射的視点」でとらえなおしたものなのである。つまり、3.2.1節でみた「絵画的半過去」が、本来なら完了相の時制で語られるはずの事態を、ことさらにその内側からとらえようとすることから、ひとつひとつの動作をスローモーションのようにえがき出すことになるのと同様に、(55)も、1968年5月革命の帰趨をさだめる重要なできごとに意味づけをあたえる効果を出しているのである。

3.4. 叙想的アスペクトに関するまとめ

以上、3節では、叙想的アスペクトについて、それぞれの事例に即して考察してきた。たとえ叙事的アスペクトの次元では完了相の事態であっても、それが叙想的アスペクトの次元において未完了相、すなわち入射的アスペクトでとらえなおされることにより、半過去や現在分詞が用いられている例を中心に分析してきた。しかし、叙想的なレベルでそうしたアスペクトの「転換」がみられる例を中心に観察してきたのは、あくまでも叙想的アスペクトのもつ重要性、独自性を確認するためであって、そのような場合にしか叙想的アスペクトが存在しないという趣旨ではない。3.2.3節の最後にのべたように、もともと叙事的アスペクトの次元でも未完了相の事態であっても、文レベルでの、あるいは談話レベルでの総体的解釈としては、叙想的アスペクトのなかに、いわば、とり込まれていると考えられるからである。

4. 叙想性と未完了アスペクトとの連関

これまでの事例研究からもわかるように、叙想性は未完了アスペクトと親和性がきわめて高い。以下では、それらのあいだにどのような内的連関があるのか、ということ考察してゆきたい。

日本語の「叙想的テンス」を考察している寺村(1984)も、たとえば、つぎの例にみられるような、「た」の「忘れていたことの想起」(*ibidem*, pp.107-109)の用法をひきあいに出して、動詞は「状态的述語に限る」(*idem*)としている。

- (56) 「どこまで帰るんだったかね」と真吾は言おうとしてやめた。もうおそらく二十度も聞いておぼえないことだ。

(川端康成『山の音』, 寺村 1984, p.107)

(56) も、(57) のように「のだ(んだ)」¹⁵ をとりはらうと、解釈が一変し、単なる過去の(完了した)事実の確認になる。

- (57) 「どこまで帰ったかね」(*idem*)

フランス語に関しても、渡邊(2006)以来、渡邊(2007 a)(2007 b)(2008)

(2009 a)などで、半過去のさまざまな用法を扱ってきた。日本語が動詞（などの述語）の語彙レベルで未完了相を標示しているのに対し、フランス語は、それにくわえて、半過去という時制が未完了相を包蔵しているという点がちがっているものの、より広くみれば、叙想性が未完了相であらわされるといふ点は共通しており、叙想性と未完了相との連関ということを一般的な問題として問うてゆくことができると思われる。

金水（2001）は、日本語を対象として、「静的述語文」（すなわち、語彙的に状態相の述語をもつ文）が、「情報的性質」（本稿でいう叙想性に類する）¹⁶と関連していることをのべ、その関連の理由について、つぎのようにいっている。

- (58) 「静的述語文が表す状態は、むしろ話し手の知識とは無関係に、それが真である期間、《特性》として潜在している。《特性》は、いわば“もの”としての性質を持って、存在しているといつてよい。“もの”は出来事と違って、時間を超越しているので、本来時間性を持たない。“もの”が時間と関連づけられるためには、言語主体の直接経験のなかでそれがどのように立ち現れたか（あるいは立ち現れなかったか）という点を除いてはあり得ない」（*ibidem*, pp.67-68）

このように、「情報」を「存在」とむすびつける議論は、叙想的時制と未完了アスペクト（とりわけ状態相）との連関を考察してゆくうえで、有力であると思われる。

フランス語でも、たとえば以下の例に端的にみられるように、情報を「存在する」ものとして表現することはありふれており、「情報」と「存在」との連関が言語的にも明らかになる。

- (59) Au départ, **il y a une information** à communiquer, puis sa transcription en message par l'émetteur utilisant le code communicationnel, puis son décodage et sa réception par le destinataire.
(I. Théry, *La distinction de sexe : une nouvelle approche de l'égalité*, p.208)
はじめに、伝えるべき**情報がある**。そして、それが発信者によって、伝達のコードを用いてメッセージに書きかえられ、そのあとで受信者によってコード解読され、受容される。
- (60) **Des renseignements existent** dans les archives des pays fréquen-

tés par les Savoyards, mais leur découverte est très aléatoire.

(Ch. Maistre *et alii*, *Colporteurs et marchands savoyards dans l'Europe des XVII^e et XVIII^e siècles*, p.191)

サヴォワ人たちがよく行っていた地方の記録には情報は存在するが、それらが発見されることはたいへん偶然的である。

「情報」と「存在」との連関は、本稿のことばで言いかえれば、叙想的にとらえなおされた内容が「存在する」ものとして扱われるということであり、それによって、(59)、(60)にみるような存在表現を典型とする状態性を帯びることになる。このことから、叙想性と未完了アスペクトとの連関が説明できるのである。

それにくわえて、叙想性と未完了アスペクトとの連関には、つぎのような理由も考えられる。叙事的時制に関しては、多くの場合、指示対象となる事行が、現実世界に「支え」(support)として存在する。しかし、叙想の対象となる内容は、叙事的な場合とちがって、経験的な世界と(すくなくとも直接には)むすびついていないため、あたかも幻影的な映像のように思いだかれるのではなかろうか。そのように、映像として思いだかれる対象をさし示すため、「想像」、「空想」、「回想」などを広くおおう辞項として、「想定」という語を用いることにしよう。「想定」は、事態そのものではなく、あくまでもそれを叙想の対象としてとらえなおした内容であるため、経験的な「支え」がない。その代償として、ひとは内容を、そのまっただ中で映像化し、疑似体験しようとするのではなかろうか。それがまさに、未完了アスペクトの特徴である入射性に対応しているのである。たとえば、3.2.1 節でふれた絵画的半過去が、内容をあたかも静止画像かスローモーションのようにえがき出す効果をもっていたことを思いおこすならば、「想定」と未完了相とのあいだの親和性が理解できであろう。また、2.1.1 節で言及した間接話法補足節に生起する半過去も、他者の言説や思考内容を「想定」していることから、入射的アスペクトがふさわしいことになる、というつながりがあると考えられる。さらには、木島(2011, pp.126-127)の指摘によると、視覚動詞 *voir* の直接目的補語の属詞に現在分詞を用いる場合と、不定法、関係節などを用いる場合をくらべると、想像裡の視覚を表現するには、現在分詞が適しているという。つぎの例をみよう。

(61) — *Oui, bien sûr, dit-elle, c'est retransmis, c'est vrai... Mais tu m'as*

surprise, ce côté mélomane chez toi...

— Chez toi aussi. Qu'est-ce qu'il t'a pris? Je te voyais **bridgeant** chez les Daret, ou...

(Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, p.80, cité dans 木島 2011, p.126)

「ええ、そりゃそうね、中継されたんだわ、そうだわ... でもあなたの音楽趣味にびっくりしたのよ」

「君の音楽趣味にもびっくりしたよ。いったい、どういう風の吹きまわしで音楽会なんかに行ったの？ ダレのところまでトランプでもしているんだと思ってたよ。それとも ...」

(62) Je te voyais **bridger** chez les Daret. (木島 2011, p.127)

(63) ? Je te voyais **qui bridgeait** chez les Daret. (*idem*)

(64) ? Je te voyais **en train de bridger** chez les Daret. (*idem*)

木島 (*ad loc.*) によると、もともと現在分詞が用いられていた (61) を、(63) のように関係節で言いかえたり、(64) のように *en train de...* で言いかえたりすることはむずかしく、(62) のように不定法を用いて言いかえることは不可能ではないが、「不定詞節の場合は、実際に知覚しているような印象を持ち、Vant [現在分詞, n.d.a.] を用いることで、より「想像している」印象を受けるようである」(*idem*) という。このことから、想像裡の視覚を表現するには、現在分詞が適していることがわかる。この現象について、本稿のたちばからのべると、想像裡の知覚もまた上記でいう「想定」であり、叙想性をおびていることから、それが入射的アスペクトをあらわす現在分詞による表現に適しているということであらうと説明できる。

5. 叙想的アスペクトと認知モード

本稿でいう「入射的視点」は、3節を通じてみてきたように、半過去や現在分詞のさまざまな用法において明確に観察されるものであるが、和田 (2007) (2009) が英語・日本語における類似の事象を扱う際に提唱している「[内]の視点」の概念と接続可能なものであると思われる。和田 (2009) から以下に引用する。

(65) 「直示的中心 (Deictic Center) である「発話状況」(話者の「いま」

と「ここ」から話者が現象（場面）を直接捉える場合、当該現象（場面）を話者とは離れたものとして外側から描写していれば「外」の視点を取っていることになり、当該現象（場面）内の人物の視点もしくは話者がその現象（場面）内に組み込まれた自らの視点を通して当該現象を描写していれば「内」の視点を取っていることになる。」

(*ibidem*, pp.249-250)

このような視点のとりかたは、本稿でいう「入射的視点」が、事行の中途のみを視野におさめていることから、それを内部からえがき出すということとあい通じるものであり、さらにいうと、大久保（2007, p.3）が半過去を「（発話の場とは）別のどこかで（発話者とは）別の誰かが描写していること」をあらわす時制として規定し、その「別の誰か」を「二次的主体」と呼んでいることとも均質の扱いが可能であると思われる。大久保（2007）のいう「二次的主体」とは、本稿筆者の理解では、半過去におかれた動詞事行の内部からその事行をながめる視点に対応している（したがって、この点はさらに、2.2.5節の末尾でみた、半過去があらわしうるポリフォニー性、言説の他者性ともつながっているといえる）。

さらに、時制論にかぎらず、言語のさまざまな側面にあらわれてくる諸特徴を総合的に視野におさめた、たいへん興味深いわく組みとして、中村（2009）による「認知モード」というものがある。中村（2009）は、Langacker（1985）による「標準的視点構図」（*canonical viewing arrangement*）と、「自己中心的視点構図」（*egocentric viewing arrangement*）の区別に依拠しながら、それを発展的に概念化しなおし、あらたに「Iモード」（*Interactional mode of cognition*）と「Dモード」（*Displaced mode of cognition*）という区別を提唱している。Iモードとは、認知主体が対象や環境との「インタラクションを通じて認知像を形成する」（中村 2009, p.359）認知モードのことであり、上記の和田（2009）における「「内」の視点」におおよそ対応する。それに対して、Dモードとは、「認知主体としての私たちが、何らかの対象とインタラクトしながら対象を捉えていること（認知像を形成していること）を忘れて、認知の場の外に出て（*displaced*）、認知像を客観的事実として眺めている」（中村 2009, p.363）という認知モードである。中村（2009, p.371）は、「日本語・英語はそれぞれIモード・Dモードを反映する言語の典型とみなすことができる」とし、下記の（62）のような表をかかげている。

I モード・D モードという類型化のなかで、フランス語がどのような位置を占めるかについては、春木（2011）が議論しており、「フランス語が言語タイプとしては英語に近いのは確かであるが、発話者・発話空間と言語表現との関係においては、実は英語よりもむしろ日本語タイプの言語に近い点も持っている」（*ibidem*, p.61）と、I モード、D モードの両方の特徴をあわせもつ中間的な言語であるという見解を出している。春木（2011）は、フランス語の諸特徴を中村（2009）の表に1列をつけくわえるかたちでまとめているので、(66)ではそれをあわせて示しておく。

(66) 表：I モード、D モードの諸特徴（中村 2009, pp.371-372, ただしフランス語の部分は春木 2011, pp.63-64 による）

	I モード言語 (日本語)	D モード言語 (英語)	フランス語
a. 人称代名詞：	多様	一定	一定(ただし on など)
b. 主観述語：	あり	なし	なし
c. オノマトペ：	多い	少ない	少ない
d. 主体移動表現：	通行可能経路のみ	通行不可能経路も可	通行不可能経路も可
e. 間接受身：	あり	なし	類似表現あり (se faire, se laisser, se voir)
f. 与格か間接目的語か：	与格 (利害の与格)	間接目的語 (受け手)	利害の与格あり
g. 難易中間構文と対応表現：	直接経験表現	特性表現	ともにあり
h. 過去時物語中の現在時制：	多い (e.g. 「る」形)	まれ	多い
i. 題目か主語か：	題目優先	主語優先	日常語では題目優先
j. かきませ：	あり	なし	なし
k. 代名詞省略：	多い	まれ	まれ
l. 語順：	SOV	SVO	SVO
m. R/T か tr/lm か：	R/T	tr/lm	一部 R/T
n. be 言語か have 言語か：	be 言語	have 言語	have 言語
o. 「する」と「なる」：	「なる」	「する」	一部「なる」
p. 非人称構文：	あり	なし	なし
q. 虚辞：	なし	あり	あり
r. 終わり志向性：	なし	あり	あり
s. アスペクト：	始まり志向	終わり志向	(非有界優勢)
t. 動詞 vs. 衛星枠づけ：	動詞枠づけ	衛星枠づけ	動詞枠づけ
u. 冠詞の有無：	なし	あり	あり (ただし部分冠詞)
v. 話法：	ほぼ直接話法のみ	直接, 間接話法	自由間接話法あり
w. 従位性の度合：	低い	高い	高い

個別の特徴に関する議論については、中村（2009）、春木（2011）を参照さ

りたい。ここでは、各言語の背景にある認知の態様（の傾向）について、このような広汎な特徴の対比が可能であるということをおさえておいたうえで、以下、当面の問題に関係する、アスペクトにかかわる部分についてのべたい。

アスペクトとかかわるのは、(66)のなかで、枠でかこんだ *r*, *s* の部分である。ここでの I モードと D モードの対照は、中村 (2009, p.378) によると、進行の途中（「今昼食を食べている」）と終わりの後（「もう昼食を食べている」）の標示を兼務する「～ている」形が存在する日本語は、それらの意味がいずれも「始まりの後」という共通点をもつことから、「始まり志向」であるのに対して、進行の途中（« *We are eating now* »）と、始まりの前（« *We are eating out tonight* »）の標示を兼務する進行形が存在する英語は、それらの意味がいずれも「終わりの前」という共通点をもつことから、「終わり志向」であるというかたちで一般化される。

しかしながら、春木 (2011, p.69) が指摘しているとおおり、フランス語には英語の進行形に直接対応するものはなく、ある程度共通するところのある半過去を比較対象とするならば、(67) のように出かける準備をして家の外に出たあたりまでをさす用法があるという点では「終わり志向」であるともいえるが、(68) のように、文脈によっては終わったばかりのことを指す用法もあるという点では「始まり志向」であるともいえ、「終わり志向」/「始まり志向」による分類があまりうまくいかない¹⁷。

- (67) Je **sortais** quand le tremblement de terre est arrivé. (*idem*)
 わたしが出かけようとしていたら、地震がおきた。
- (68) J'ai rencontré les réfugiés qui **arrivaient** du Kosovo. (*idem*)
 コソヴォからやってきた難民に出会った。

春木 (*ad loc.*) は、代案として、「有界」/「非有界」という特徴を重視し、フランス語に関しては「非有界」のほうが優勢であるとしている。「有界」/「非有界」という特徴は、ここでは事態そのものの時区間が「開いている」か「閉じている」ということではなく、「D モードがメタ認知的であり、認知の全貌を一挙に眺めるために、対象が有界的に捉えられることになる。逆に I モードは対象と身体的にインタラクトしながら対象認識をする認知モードなので、対象の認識は非有界的になる」（中村 2009, pp.377-378）ということである。したがって、3.1 節でみた「総覧的視点」、「入射的視点」、「回顧的視点」とい

う「視点」の問題である。本稿筆者も、春木（2011）と同様、フランス語（もふくめたさまざまな言語）に適用可能であるのは、「終わり志向」/「始まり志向」ではなく、「有界」/「非有界」の区別であると考えている¹⁸。

本稿でいう「入射的視点」が、認知モード論でいう「非有界の認識」に対応していることは明らかである。そして、Iモードの名称にもなった、状況との「インタラクション」をおこなう主体の存在が、2.2.5節の末尾でみた、半過去があらわしうるポリフォニー性、言説の他者性や、上記の大久保（2007）のいう「二次的主体」ということとつながっているのである。

したがって、叙想的アスペクトは、認知モード論でいう「Iモード」の一環をなしているものであり、本稿でみてきたような、フランス語の半過去や現在分詞に、叙想的アスペクトを表示する用法が発達していることもまた、フランス語のIモード的な側面を示している事象であると考えられる。

6. おわりに

本稿では、動詞のあらわす事行を直接時間軸上に位置づける叙事的時制とならんで、動詞事行を眺望する視点や、事行を概念化した結果的な内容を時間軸上に位置づける叙想的時制を、もうひとつの重要な時制の機能として提示してきた。また、事態そのものの展開のしかたを示す叙事的アスペクトとならんで、その事態に対する見かたを示す叙想的アスペクトを、もうひとつの重要なアスペクトの機能として提示してきた。

本稿の議論では、半過去のいわゆる「モダールな用法」に言及する箇所以外では、「モダリティ」という用語はあえて使わなかったが、叙想的時制、叙想的アスペクトは、事態そのものには内在しない、時制やアスペクトに対する見かたを発話者が積極的につくり出すことによって得られるものであり、発話者による判断であるモダリティが、時制やアスペクトの領域にも、いわば滲入してきていることを示している¹⁹。このことは、モダリティの遍在性を示すものであると同時に、フランス語の時制・アスペクトにおいてこうした叙想性が目立つことは、フランス語の「Iモード」的な側面を示しているものと思われる。

註

1 この論文は、2008年度～2011年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番

号 20520348 「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」(研究代表者渡邊淳也)の助成をうけて行なわれた研究の成果の一部である。原稿の段階で貴重なコメントをくださった査読委員の和田尚明さんにこころより感謝申しあげたい。なお指摘されうる問題点は、もちろん、ひとえに本稿筆者に帰すべきものである。

- 2 例文の和訳としては、便宜的に「試合があった」としておいたが、破棄されているわけではない予定を単に思いだしたときにも、「そうだ、来週月曜は試合があった」のように「た」を使うことができる日本語とは事情がことなる。
- 3 便宜的に「だった」と訳しているが、もちろん日本語の「た」が、フランス語の「丁寧の半過去」に対応しているわけではない。なお、フランス語の丁寧の半過去と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照については、渡邊(2006b)(2007a)を参照されたい。
- 4 叙実性の概念については、Kiparsky et Kiparsky (1970), Karttunen (1971), Korzen (2001)などを参照。
- 5 ただし、「時制の照応」の伝統的な概念化には問題がある。Berthonneau et Kleiber (1997)が指摘しているように、「時制の照応」を、直接語法の被引用部を間接語法の補足節にする際、時制をいわば機械的に変換する規則としてとらえるのは誤りである。ここでは、「時制の照応」を、間接語法の補足節という統辞的条件のもとで機械的に発動される規則としてとらえるのではなく、過去時に視点をおいて事行をながめる叙想性の一環として考えたい。詳細は別稿にゆずらざるを得ないが、「時制の照応の例外」といわれているいくつかの事象は、まさしく、その視点のおきかたの相違によって説明がつくという見とおしをもっている。
- 6 井元(2010)では、渡邊(2007b)について、つぎのように言及してくださった。

[本稿で(13)として引いた« Une minute de plus, le train **dé**raillait »の例について]「まず、t1(脱線する条件が生じる時点)とt2(脱線する時点)を時間軸上で想定する。渡邊(2007)による *dé*raillait の解釈は t1 - t2 (電車が脱線にいたる経過)において t2 を含まない部分をさすことになる。そして「劇的な提示」, 「切迫」のニュアンスは t2 に近づきつつあったからであると説明されることになる。しかし、これでは *une minute de plus* という副詞句をどこに位置づけてよいかわからなくなる。[中略] 渡邊(2007)の立場はおそらく、*une minute de plus* は t2 の時点を指定するが、文全体が記述しているのは t1 - t2 の全体であるということであろう。メンタルスペース的な言い方に直せば、t1 - t2 が FOCUS であり、t2 は EVENT であるということになる。しかし、そのような解釈が可能になるのは、副詞句が後置された

(311) Le train *dé*raillait *une minute de plus*. (あと1分で、列車は脱線したのだった)

の場合であって、前置された場合は無理だろう。」(井元2010, pp.215-216)

これに対しては、渡邊(2007b, p.159-160)で Berthonneau et Kleiber (2003)に依拠しながらのべたように、副詞句前置の場合、*une minute de plus* のような「*de plus* 型副詞句」は、t2 に事行を位置づけているわけではなく、単にさしさまっていた脱線までの時間差を示しているにすぎない、と答えたい。このよ

うな「de plus 型副詞句」とちがって、t2 への位置づけを積極的におこなうのは（すなわち、井元（2010）のような議論の対象になりうるのは）、une minute après, une minute plus tard といった、「après 型副詞句」のほうである。それらふたつのタイプの副詞句のうち、間一髪の解釈と親和性が高いのは「de plus 型副詞句」であり、「après 型副詞句」では、（たとえ前置されても）どちらかという脱線が回避できなかった解釈（上記引用中の（311）とおなじ、「結末の半過去」の解釈）が優勢である。

- 7 接客の半過去に関するより詳細な考察、ならびに、日本語の「よろしかったでしょうか」との対照研究については渡邊（2006）（2007 a）を参照されたい。
- 8 ステレオタイプ概念については、渡邊（2011 a）を参照。
- 9 ここでは R は repère（基準点）の略号である。（40）の単純過去の場合は、基本的には基準点は事態の始点（R1）にあるが、二次的に事態の終点（R2）にもおかれることがあるという。それに対して、（41）の半過去の場合、（42）の複合過去の場合は、基準点（R）はひとつしかない。
- 10 Barceló et Bres (2006, pp.24sq. による [+ 入射] ([+ incidence]) という特徴や、「入射的アスペクト」(aspect incident) という用語は、ここでいう「入射的視点」とは逆に、事態全体を一挙にとらえるようなアスペクト（すなわち、ここで採用している用語法では「総覧的視点」にあたる）をさす用語として使われているので、注意が必要である。
- 11 Hayase (1997) のいう「強制」([英] coercion) に似ているが、「強制」は語彙的アスペクトと矛盾する解釈を文法的形式が強いることであるのに対して、絵画的半過去の場合は、半過去が語彙的アスペクトに直接対立するわけではなく、物語のなかでの継起的解釈と（一見）対立しているという点がちがっている。
- 12 「説明」ということが、モダリティのひとつのあらわれと考えられることがある。とくに日本語学では、「説明のモード」(寺村 1984, pp.261 sqq.) というカテゴリーがたてられる。
- 13 渡邊（2011 b）は現在分詞全般に関する研究であったため、以下の論述は、例文も含めて渡邊（2011 b）と重なるところが多いが、本稿では、叙事的アスペクトとちがった次元で叙想的アスペクトが機能していることを新たに確認してゆくことに主眼があるため、重複をおそれず諸事例を提示してゆくこととする。
- 14 この例文はもともと Togeby (1983, vol.3, p.52) に引用されていたものであるが、Togeby は最小限しか引用していなかったため、ここでは *Tout compte fait* をひもといて、やや長めに引用した。
- 15 「のだ」文であることがアスペクト性に関与しているのは、「帰った」を「帰るの（ん）だった」にすることにより、「た」に接続する述語を状態相にしているという点である。
- 16 金水（2001）はつぎのように、「意味論的テンス」と「情報的テンス」を区別している。

(i) 「文の真理条件によって決定されるテンスの機構を、意味論的テンスと呼ぶことにする。そして、静的述語文が表す状態の情報的性質に基づいて決定されるテンスを、情報的テンスと呼ぶことにする。ただしこの二つのテンスは、まったく別物ではない。情報的テンスは原則的に意味論的テンス

の内部にあって、意味論的テンスで許された範囲での形態の決定に関わる。」(ibidem, p.68)

ここでいう「意味論的テンス」と「情報的テンス」は、概略的には、本稿でいう「叙事的時制」と「叙想的時制」の区別に類するものと思われる。ただし金水(2011)は、アスペクトに関しては、「情報的テンス」の議論のわく内での扱いにとどめており、「叙想的アスペクト」に相当する概念を明示的に立ててはいない。

- 17 本稿のたちばからいうと、春木(2011)の議論にくわえて、(67)は叙事的、(68)は(属性としてとらえなおされていることから)叙想的であることにより、このような差が出ているともいえる。
- 18 ついでながら、本稿で依拠している Novakova(2001)のアスペクトモデルは、フランス語とブルガリア語の対照研究のわく内で提唱されており、その意味でも、ある程度の汎言語性をもっていることを付言しておこう。
- 19 註12でも言及した、日本語学で提唱されている「説明のモード」はこの部類にはいる。

参考文献

- Adam, J.-M. (1992): « Si hypothétique et imparfait », *Etudes Littéraires*, 25, 1/2, pp.147-166.
- Anscombre, J.-Cl. (1992): « Imparfait et passé composé : des forts en thème et en propos », *L'Information grammaticale*, 55, pp.43-53.
- Anscombre, J.-Cl. (2004): « Imparfait d'atténuation. Quand parler à l'imparfait, c'est faire », *Langue française*, 142, pp.75-99.
- 青木三郎 (1989) : 「人称に関する日・仏対照言語学的研究」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 16, pp19-44.
- 朝倉季雄 (著)・木下光一 (校閲) (2002) : 『新フランス文法事典』白水社.
- Barceló, G. J. et J. Bres (2006): *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- Berthonneau, A.-M. et G. Kleiber (1993): « Pour une nouvelle approche de l'imparfait : l'imparfait, un temps anaphorique méronomique », *Langages*, 112, pp.55-73.
- Berthonneau, A.-M. et G. Kleiber (1994): « L'imparfait de politesse : rupture ou cohésion ? », *Travaux de linguistique*, 29, pp.59-92.
- Berthonneau, A.-M. et G. Kleiber (1997): « Subordination et temps grammaticaux : l'imparfait en discours indirect », *Le français moderne*, 65, 2, pp.113-141.
- Berthonneau, A.-M. et G. Kleiber (1999): « Pour une réanalyse de l'imparfait de rupture dans le cadre de l'hypothèse anaphorique méronomique », *Cahiers de praxématique*, 32, pp.119-166.
- Berthonneau, A.-M. et G. Kleiber (2003): « Un imparfait de plus... et le train déraillait », *Cahiers Chronos*, 11, pp.1-24.
- Berthonneau, A.-M. et G. Kleiber (2006): « Sur l'imparfait contrefactuel »,

Travaux de linguistique, 53, pp.7-65.

- Bres, J. (2003): « Mais oui, il était un joli temps du passé comme les autres, le petit imparfait hypocoristique », *Langue française*, 138, pp.111-125.
- Bres, J. (2004): « L'imparfait dit hypocoristique, ou le péché d'imputation métonymique », *Le français moderne*, 72, 2, pp.129-145.
- Brunot, F. (1922): *La pensée et la langue*, Masson.
- Busuic, I. (2004): « L'imparfait d'imminence contrecarrée en français et en roumain », *Revue roumaine de linguistique*, 49, pp.41-67.
- Caudal, P. et alii (2003): « L'imparfait, un temps inconséquent », *Langue française*, 138, pp.61-74.
- Confais, J.-P. (1990): *Temps, mode, aspect*, Presses universitaires du Mirail.
- Curat, H. (1991): *Morphologie verbale et référence temporelle en français moderne*, Droz.
- Damourette, J. et E. Pichon (1911-36): *Des mots à la pensée*, 9 vols, d'Artrey.
- Desclés, J.-P. (1995): « Les référentiels temporels pour le temps linguistique », *Modèles linguistiques*, 32, pp.9-36.
- Ducrot, O. (1979): « Imparfait en français », *Linguistische Berichte*, 60, pp.1-23.
- Ducrot, O. (1984): *Le dire et le dit*, Minuit.
- Gosselin, L. (2005): *Temporalité et modalité*, Duculot.
- Grevisse, M. (1993): *Le bon usage*, 13^{ème} édition, Duculot.
- 春木仁孝 (1999): 「半過去の統一的理解をめざして」『フランス語学研究』33, pp.15-26.
- 春木仁孝 (2000): 「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo. 一半過去の属性付与機能について」『フランス語フランス文学研究』77, pp.84-95.
- 春木仁孝 (2004): 「事態把握の方策としての半過去」『言語文化研究』(大阪大学) 30, pp.229-251.
- 春木仁孝 (2011): 「フランス語の認知モードについて」『言語における時空をめぐる』(大阪大学) 9, pp.61-70.
- Hayase, N. (1997): « The role of Figure, Ground and Coercion in Aspectual Interpretation », M. Verspoor et alii (éds.): *Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of the Meaning*, John Benjamins, pp.33-50.
- 早瀬尚子 (2002): 『英語構文のカテゴリー形成 — 認知言語学の視点から』勁草書房.
- 早瀬尚子 (2009): 「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編): 『「内」と「外」の言語学』開拓社, pp.55-97.
- Imbs, P. (1960): *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- 井元秀剛 (2010): 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.
- 金子 真 (2007): 「市場の半過去と愛情表現の半過去再考: 日仏対照言語学的観点から」日本フランス語学会第242回例会発表ハンドアウト.
- Karttunen, L. (1971): « Some Observations of Factivity », *Papers in Linguistics*, 5, pp.55-69.
- 木島 愛 (2011): 『フランス語の視覚動詞表現に関する言語学的研究』筑波大学人文社会科学研究所博士論文.

- 金水 敏 (2001) : 「テンスと情報」 音声文法研究会 (編) : 『文法と音声』 3, くろしお出版, pp.55-79.
- Kiparsky, P. et C. Kiparsky. (1970): « Fact », M. Bierwisch et K. E. Heidolph (éds.): *Progress in linguistics*, Mouton, pp.143-173.
- Korzen, H. (2001): « Factivité, semi-factivité et assertion : Le cas des verbes *savoir, ignorer, oublier et cacher* », H. Kronning (éd.): *Langage et référence : mélanges offerts à Kerstin Jonasson à l'occasion de ses soixante ans*, Acta Universitatis Upsaliensis, pp.323-333.
- Langacker, R. (1985): « Observations and Speculations on Subjectivity », J. Haiman (éd.): *Iconicity in Syntax*, John Benjamins, pp.109-150.
- Le Goffic, P. (1986): « Que l'imparfait n'est pas un temps du passé », P. Le Goffic (éd.): *Points de vue sur l'imparfait*, Presses universitaires de Caen, pp.55-70.
- Le Goffic, P. (1995): « La double incomplétude de l'imparfait », *Modèles linguistiques*, 31, pp.133-148.
- Lebaud, D. (1991): « L'imparfait, une approche à partir de quelques effets indésirables causés par le discours grammatical dominant », *Cahiers de CRELEF*, 32, pp.49-69.
- Lebaud, D. (1993): « L'imparfait, indétermination aspectuo-temporelle et changement de repère », *Le gré des langues*, 5, pp.160-176.
- Lebaud, D. (1994): « L'imparfait, analyse linguistique en vue d'une conceptualisation en classe de FLE », *Le français langue étrangère à l'Université*, Instytut Romanistyki Uniwersyteit Warszawski, pp.217-230.
- Le Bidois, G. et R. Le Bidois (1935-1938): *Syntaxe du français moderne, ses fondements historiques et psychologiques*, 2 vols, Picard.
- Maejima, K. (2007): « Les énoncés irréels à l'imparfait et quelques problèmes annexes », *Revue de Hiyoshi - Langue et littérature françaises*, 44, pp.1-17.
- Mainueneau, D. (1999): *L'Énonciation en linguistique française*, Hachette.
- Martin, R. (1983): *Pour une logique du sens*, Presses Universitaires de France.
- Martin, R. (1987): *Langage et croyance*, Margada.
- Moeschler, J. (1993): « Anaphore et deixis temporelles : sémantique et pragmatique de la référence temporelle », Moeschler, J. et alii (éds.): *Langage et pertinence*, Presses Universitaires de Nancy, pp.39-104.
- Molendijk, A. (1993): « Présupposition, implications, structure temporelle », C. Vetters (éd.): *Le temps, de la phrase au texte*, Presses Universitaires de Lille, pp.167-191.
- 中村芳久 (2009) : 「認知モードの射程」 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) : 『「内」と「外」の言語学』 開拓社, pp.353-393.
- Nef, F. (1986): *Sémantique de la référence temporelle en français moderne*, Lang.
- Novakova, I. (2001): *Sémantique du futur*, L'Harmattan.
- 大久保伸子 (2007) : 「Je t'attendais 型の半過去の表現特性と非自立性について」『フランス語学』 41, pp.1-15.
- 大久保伸子 (2009) : 「ムードの「タ」について」『人文コミュニケーション学科論集』

(茨城大学) 6, pp.5-24.

- Rosier, L. (2005): « L'imparfait ventriloque ? », *Cahiers Chronos*, 14, pp.121-133.
- Sandfeld, K. (1936): *Syntaxe du français contemporain*, 2, Droz.
- 定延利之 (2001): 「ムードの「た」の過去性」『神戸大学国際文化学研究』21, pp.1-68.
- 佐藤房吉 (1990): 『フランス語動詞論』白水社.
- Schogt, H. G. (1968): *Le système verbal du français contemporain*, Mouton.
- Sten, H. (1952): *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Munksgaard.
- 田口紀子 (1992): 「フランス語人称代名詞の転用」『仏文研究』(京都大学) 23, pp.1-10.
- Tasmowski-De Ryck, L. (1985): « L'imparfait avec ou sans rupture », *Langue française*, 67, pp.59-77.
- 寺村秀夫 (1984): 『日本語のシンタクスと意味』2, くろしお出版.
- Togebly, K. (1983): *Grammaire française*, Akademisk Forlag.
- Vetters, C. (1993): « Temps et deixis », C. Vetters (éd.): *Le temps, de la phrase au texte*, Presses Universitaires de Lille, 85-115.
- Vuillaume, M. (1990): *Grammaire temporelle des récits*, Minuit.
- 和田尚明 (2007): 「「内」の視点と時制現象: 日英語対照研究」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 52, pp.93-149.
- 和田尚明 (2009): 「「内」の視点・「外」の視点と時制現象—日英語対照研究—」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編): 「「内」と「外」の言語学」開拓社, pp.249-295.
- 渡邊淳也 (2001 a): 「連結辞 *ainsi* の機能について」『玉川大学文学部論叢』41, pp.161-184.
- Watanabe, J. (2001 b): « Le conditionnel du « discours d'autrui » », *Etudes de langue et de littérature françaises*, 78, pp. 216-230.
- 渡邊淳也 (2002): 「Devoir の認知的用法と条件法」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』17, pp.189-219.
- 渡邊淳也 (2003): 「Devoir の機能について—認知的用法を中心に—」『玉川大学文学部論叢』43, pp.105-139.
- 渡邊淳也 (2004 a): 「動詞 *sembler* の機能について」『玉川大学文学部論叢』44, pp.93-112.
- 渡邊淳也 (2004 b): 「フランス語における証拠性の意味論」早美出版社.
- 渡邊淳也 (2005): 「Non seulement について」『玉川大学文学部論叢』45, pp.81-96.
- Watanabe, J. (2006 a): « Addition quantitative, addition qualitative et la locution *non seulement* », J. Kawaguchi et alii (éds.): *Cognition et émotion dans le langage*, 慶應義塾大学 (21世紀COE心の統合的研究センター), pp.191-205.
- 渡邊淳也 (2006 b): 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 50, pp.41-84.

- 渡邊淳也 (2007 a): 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』41, pp.54-59.
- 渡邊淳也 (2007 b): 「間一髪半過去をめぐって」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 52, pp.151-175.
- 渡邊淳也 (2008): 「分岐の時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 54, pp.15-44.
- 渡邊淳也 (2009 a): 「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』43, pp.77-83.
- 渡邊淳也 (2009 b): 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 55, pp.123-144.
- 渡邊淳也 (2010 a): 「拘束的用法の *devoir*, *falloir* の否定の多義性について」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 57, pp.25-41.
- 渡邊淳也 (2010 b): 「フランス語と日本語における留保マーカーについて」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 58, pp.55-74.
- 渡邊淳也 (2011 a): 「ステレオタイプ理論をめぐって」『フランス語学研究』41, pp.54-59.
- 渡邊淳也 (2011 b): 「ジェロンディフと現在分詞について」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 60, pp.121-181.
- Wilmet, M. (1997): *Grammaire critique du français*, Hachette.